

固な組織」と元隊員の半数が認める自衛隊なのに、企業の事業部や工場  
の退職者親睦会と比較しても加入率  
は低い。防大や幹候校などの同期会  
へ注入するエネルギーが膨大過ぎる  
からであろうか。一考を要する。

最後にこの種の調査研究を半世紀  
も続けてこられた研究会メンバーに  
敬意を表すると共に、明治時代から  
ミリタリー・カルチャーを伝承して  
きた『偕行』もご協力できないか、  
と思量している。



## 近世オーストリアの 従軍司祭から学ぶこと

賛助会員 吉野 留美

編集委…この記事は、東京郷友連盟  
発行『わたし達の防衛講座』（令和

6年1月1日）に掲載されたもので、  
許可を得て転載しています。

はじめに

東京郷友連盟の集まりで、「モン  
ゴル軍がヨーロッパに侵攻し、ウイー  
ンのすぐそばまで迫ってきた」とい  
う話が出たことがあった。自分たち  
とは全く異なる価値観を持つ国との  
戦いについては、私たちがも対岸の火  
事ではなく、差し迫った大きな問題  
として捉えなくてはならない。そこ  
で今回は、モンゴル軍のヨーロッパ  
侵攻から400年以上後の話になる  
が、イスラム勢力との戦いで活躍し  
た、オーストリアの従軍司祭を紹介  
したい。そして彼の行動から、私た  
ちが何を学ぶことができるのかを考  
えたい。

従軍司祭とは

従軍司祭とはその名の通り、軍隊  
に所属している司祭（注1）のこと  
である。軍の中で様々な行事や儀式  
を執り行なったり、兵士たちの心の  
ケアをしたりする職務を負ってい  
る。例を挙げると、殉職した兵士の  
追悼ミサ、海外遠征前の激励ミサ、  
また、病气や怪我で体が弱っている

際や臨終の際の儀式などである。心  
のケアとはその文字の通り、精神的  
な支えをすることなので、軍におけ  
る司祭の必要性は高い。外国へ派遣  
される部隊にも、従軍司祭が同行す  
ることが多い。オーストリア軍の公  
式発表によると、現在、コソボ、ボ  
スニア・ヘルツェゴビナ、レバノン  
の各国に派遣された部隊に、従軍司  
祭が同行している。

今回紹介する司祭マルコ・ダヴィ  
アーノは、オーストリアの皇帝レオ  
ポルト一世に仕え、ウィーンを包囲  
したオスマン帝国軍を撃退する際に  
活躍した司祭である。

注1…日本では、カトリックの聖職  
者は一般的に「神父」と呼ぶことが  
多い。今回取り上げる神父の正式な  
肩書は「司祭」であり、従軍する聖  
職者も基本的には司祭であるので、  
「従軍司祭」という名称を用いる。

マルコ・ダヴィアーノの功績

マルコ・ダヴィアーノは1631  
年、ヴェネツィア共和国のアヴィ  
アーノという町（現在は空軍基地が  
ある）の、信仰心に篤い裕福な市民  
の家に生まれた。この時代のヨー

ロッパはオスマン帝国からの攻撃を  
度々受けており、マルコの出身地周  
辺でも、何万人という住民が犠牲に  
なっていた。このような状況の中で  
育った少年が、強い愛国心を持つ  
のは当然であろう。彼には、祖国をイ  
スラム勢力から守るために、実際に  
戦場に行つて戦いたいという気持ち  
があった。しかし、最終的にはカプ  
チン会という修道会に入ることを決  
めた。カプチン会ウィーン管区所蔵  
の資料には、マルコは自分の将来を  
決める際、「戦場で戦う以外にも、  
自分の国を守る方法があるというこ  
とを、慈悲の光の中にみつけた」と  
書かれている。

司祭になり各地に赴いた後、マル  
コは、オーストリア皇帝レオポルト  
一世の霊的指導者になった。霊的指  
導者というのは、信仰を助け導いて  
くれる人のことだが、身近な悩みや  
将来のことなどを相談する相手とな  
ることも、往々にしてある。レオポ  
ルト一世はマルコを大変信頼してお  
り、信仰以外にも、様々なことを相  
談していたと、いくつかの文献に記  
述されている。  
1683年、オスマン帝国軍に  
ウィーンが包囲されたのだが、あわ

やというところで「反転攻勢」がうまくいき、撃退することができた。その際の功労者の一人として、マルコの名前が挙げられている。

マルコが行なったことは、まず、皇帝軍の中にポジティブで友好的な関係を築かせ、結びつきを強めることであつた。兵士たちは様々な地域・地域から集まっていたため、敵対するようなこともあつたという。内部分裂しては、共通の敵に一丸となつて向かつて行くことなどできない。

次に当然ながら、兵士たちの霊的指導である。平時であれば信仰を導き、ちよつとした悩みの相談も受けたであろうが、舞台は戦場である。ふとした時に出てくる、兵士たちの弱い心を鼓舞したであろうことは、想像に難くない。

そして、ミサの中でも度々兵士たちを激励しており、オーストリア軍が反転攻勢を掛ける直前にも、マルコは特別なミサを立てている。カプチン会ウイーン管区所蔵の資料には、このミサでの祈りの言葉が残っているが、その中には以下のような文言が見受けられる。

「聖なる信仰を守るために戦いに赴

く、キリスト教徒の軍を強めてください」

「敵を壊滅させるために、兵士たちに強い力を与えてください」

これらを読むと、今の日本でサヨク活動家と一緒にたつて国防に反対している、「聖職者」達の偽善・詭弁がよくわかる。マルコは平和を愛する聖職者だつたからこそ、自国の平和を守るために戦う兵士たちを、全力で応援したのだ。

### 我々は何を学び得るか

マルコは、軍人として戦場で戦う以外の方法で、国土防衛の一端を担つた。これは、岩田清文元陸上幕僚長（陸自79）の「軍人が戦場で『戦う』だけではなく、民間人が自分のできることをして『闘う』ことも重要」や、武田正徳元陸将（陸自74）の「軍人だけでなく、民間も含めた国家のあらゆる力が必要」、織田邦男元空将（空自74）の「国家を支えるのは一人一人の国民だ」という当事者意識」といった発言と関連するのではないか。

ウイーンでの反転攻勢が辛うじてうまくいき、結果的にオーストリアは、オスマンの軍門に下ることは無

かつた。しかし、国内のウイーン以外の地では、おびただしい数の犠牲者が出た。敵に攻められるを思いとどまらせるような防衛体制を敷いていたら、どうなっていたらうか。手

を出したら、反対に壊滅させられるのではないかと不安を抱かせていたら、攻撃されなかつた可能性は極めて大きいと思う。また、事前に敵の動きを察知し先制攻撃ができていたなら、そこで戦争は食い止められていたのではないだろうか。

いくつかの文献には、皇帝レオポルト一世が優柔不断だつたと記されている。彼が勇敢で決断力のある為政者であつたなら、この戦争は避けられた、あるいは被害が少なくて済んだかもしれない。今の日本の安全保障環境は、かつてないほど悪いと言つていい。このような状況にも関わらず国防を重要視せず勉強もせず、勇敢でもなければ決断力も無いような人が国のトップであれば、最悪である。

我々はマルコの姿勢や行動から、実際に戦場に赴かなくても、民間人として「国防」ができるということ学べるのではないか。具体的にできることは、その人によって異なる。

自分は国を守るために何ができるのかを常に考え、できることからすぐに始めることが重要である。残された時間は、あまり無い。

※ご参考…カプツィーナ教会は、ウイーン市内ホーフブルク宮殿近くにあり、教会内の礼拝堂にはオスマン帝国がウイーンを包囲したときに活躍したマルコ・ダヴィアーノ司祭の棺が安置されています。

地下には納骨堂があり皇帝廟とも呼ばれ、ハプスブルク家・ハプスブルク＝ロートリンゲン家の皇帝や皇后、その子孫らが埋葬されています。

